

序論

まず初めに、「現代神学」という言葉が指し示す内容には幅があるので、わたし自身が、この語をどのように捉えてるのかを説明することで、本文理解の助けになればと思う。初めに、「現代(contemporary)」という語についてだが、時期的には第一次世界大戦から今日までという範囲と考えている。そのため、カルビンやルターのような神学大家はプロテスタント神学にとって重要な存在ではあるが、ここでは取り上げることはしない。またアウグスチヌス(A)、バルト(B)、カルビン(C)、シュラエルマッハー(s)は、神学の基本(ABCs)と言われているが、バルトを除いては、現代神学というよりは、歴史神学の分野で扱うことがふさわしいと思われるのでここでは取り上げない。

第2に、私は「神学(theology)」という語を単数形として用いてはいるが、意味としては複数の意味を持つものとして考えている。そう意味では、正確には「現代神学」という語よりも、「現代諸神学(contemporary theologies)」と言った方がより正確なのかもしれない。このことはプロテスタント神学であれ福音主義神学であれ、現代神学の世界では、神学上の選択肢として幅の広い立場が存在することに他ならない。それゆえ、洞察力に富んだ読者は、現代神学を批判的な目を持って読むことになるだろう。

第3に、私は現代神学が組織神学の一分野であると理解している点をあげたい。もちろん、旧約学や新約学のような他の神学的分野の中にも、最新の現代的な著述は存在する。しかし、それらの分野は現代組織神学に関する概観である本文が、取り扱う範囲にあるとは考えていない。

第4に、現代神学を概観しようとする時、少なくとも3種類のレンズを通してみることができると理解している点があげられよう。一つ目は神学者自身、2つ目に神学的見解、そして3つ目は神学者たちが用いる神学上の方法論であり、それぞれに焦点を当てることによって考察しうる。どのアプローチもそれぞれの良さがある。宇田進氏の現代神学に関する最近の本では、この3つのアプローチを全て扱っている。¹ 本文でも、これら3つのレンズを用いて考察していきたい。

現代神学の出版スピード

さて、現代神学は非常に早いペースで書かれ、出版されている。これはおそらくコンピュータによる有利さのおかげであろう。時には、この高速化によって著作の熟考と徹底さが欠けてしまうこともある。かつての著者たちは単にできるだけ早いペースで自らの良い見解を書くことだけに集中すれば良かった。しかし、現代神学のペースについて行こうとする者にとって、この生産スピードの意味するところは、すなわち、いつも他人の本を読んでいなければならないということだ。決して読む仕事が尽きることはない。現代神学について書く人にとって、このスピードが意味するもう一つのこととは、「現代」という言葉をつけて出版されたほとんどの作品は10年以内に不適切になってしまうということだ。際立った功績のあった著作だけが、

¹ 宇田進『現代福音主義神学：Contemporary Introduction to Evangelical Theology』いのちのことば社、二〇〇二年。

長期間の寿命を持つことになる。これは、当然本文にも当てはまることだ。

今、神学が書かれているスピードが早いのは、キリスト教神学には多様な見解が存在しているからでもある。技術的進歩のおかげで、印刷物としてだけでなく、インターネット上でも、これらのあらゆる見解がかなり容易に世に出されるようになった。たとえば、アリスター・マクグラスのキリスト教神学に関する入門書には（英語でも日本語でも出版されている）、神学のウェブサイトのリストも含まれている。² 私自身も、これまで神学ウェブサイトアクセスしてきた(<http://www.cptheo.net>)。このような意見の多様性はかつて基本的で、根本的な神学項目、すなわち、神（神論）、キリストの本質とわざ(キリスト論)、救い(救済論)にも及んでいる。これらの項目には、現代福音主義神学を含め現代神学の分野で高い関心が集まっている。

その多様性は神学的に何を土台としているのか、またそれら土台にどの程度権威を与えるかというような方法論的な問題にも及んでいる。すなわち、聖書、教会伝承、教会、そして、文化といったものの重要度が、それぞれ「神学をする」者によって異なっているということだ。歴史的にプロテスタント神学とローマ・カトリック神学の間では、ひとつの大きな違いがあった。プロテスタントが聖書の権威の優先性（原典において）を主張したのに対し、ローマカトリックでは、教会が教会伝承と聖書自身の両方に対する権威ある仲介者であると理解してきた点である。しかしながら、多くの現代プロテスタント神学者は、福音派も含めて、神学に対する土台としてもっと教会に権威を与えるべきであると主張しているように見えてならない。これらの神学者たちは、神学は、共同体である教会のために書かれたものであり、それゆえ、神学は本来、教会に対して納得のいく説明をする責任があると示唆しているように見える。教会という共同体は神学それ自身を超えて権威あるものになってしまう。スタンレー・グレンツの神学入門書のタイトルが「神の共同体としての神学」となっていることは、偶然ではないのである。³ しかし、もし教会が神学を評価する一番の評価者となってしまうなら、聖書の中で明らかにされた真理や愛の基準を神学が教会に保持させることができるだろうか。果たして神学が教会に対して預言的にものを言うことができるのだろうか。

ところで、現代神学を学ぼうと思えばいくらでも材料はそろっている。クリスチャンの中で、神学上の立場にはかなりの幅があるという意識を持たない人や神学教育を受けていない人は、たまたま最初に読んだ神学的な見解を意外と簡単に受け入れてしまう傾向がある。もし、彼らが読んだものがバランスの取れたものであれば、彼らの信仰は豊かになるだろう。しかし、もし、大いに論争の余地のある見解を読んでしまったら、彼らはその著者の立場をきちんと評価することはできないだろう。もちろん、牧師や宣教師たちはたとえ現代神学の出版スピードについていくことができなくても、少なくとも現代神学における諸問題にとりくむ上での初歩的な意識を含めて、神学の基礎を知っているなら、神学上の迷路から信徒を守る上で大きな助けになるだろう。

² Alister McGrath, *Christian Theology: An Introduction* (Oxford: Blackwell, 2001), 589-92. アリスター・E・マクグラス（神代真砂実訳）『キリスト教神学入門』教分館、二〇〇二三年、xv-xvii 頁。

³ Stanley Grenz, *Theology for the Community of God* (Nashville: Broadman and Holman, 1994).

古典的な神学に対する現代神学の懐疑性

私たち人間は概して新しいもの好きである。現代神学にも同じ傾向が伺える。この新しい見解に対する積極的な傾向は、福音的な現代神学者たちが新正統主義を益々積極的に評価するようになってきている態度にも表れている。逆に、新しい見解に対する現代神学の神学的探求は古典的な見解や考えに対して批評的な立場を取り易くさせてしまっているように見える。歴史神学に対する敬意を失ってしまったことが、過去を作為的に単純化しながら、評するという現代神学の傾向を加速させてしまっている。つまり、現代神学は過去を極端に単純化させてしまっているのだ。たとえば、アイレニウスを支持すると主張することは宗教多元主義者にとっても宗教排他主義者にとっても珍しいことではない。そのような浅い歴史研究は修正主義者の歴史神学に向かわせてしまう。現代神学は新しくて、より魅力的であるか、またはより適当な神学的概念を生み出すために歴史を操作するという傾向さえ持っているようだ。

このように現代神学は古典的な神学に対して新しさの魅力と古典的な神学への刺激的な疑いや不敬の念を持っていると言えよう。現代福音派神学者たちの間でもその幾人かは、古典的な神学に反対する一番の理由として、それが単に古いから誤っていると述べているという始末だ。現代神学者でありながら古典的な見解を擁護すれば批判の嵐をその身に招くことになる。

幸いにも幾人かの神学者たちは、従来神学的立場のことを、深い尊敬の念を込めて、現代福音神学と呼び始めている。トーマス・オーデンは恐らく、その最も良く知られている人だろう。⁴しかし、その他にも、もっと若い神学者たちの中に教会史に真面目に取り組んでいる人々がいる。日本同様、英語圏でも、若い歴史神学者はまれである。しかし、若い学者たちの間で、歴史神学を注意深く評価する必要があるという意識が高まりつつあるようだ。おそらくこの傾向は、いつの時代でもそれぞれの時代的な、また文化的な文脈の中で神学というものがなされてきたという理解が深まりつつあるからだろう。マクグラスは神学にとって歴史は重要であると信じる神学者の一人であるが、実際彼の神学入門書の3割は歴史に焦点が当てられている。

現代福音主義神学のアイデンティティの探求

おそらく、このような過去の神学に対する批判的な態度や作為的な単純化は、現代神学が今まさに混乱の中にあることを物語っている。現代神学のアイデンティティが危機に直面しているということだ。この混乱は特に福音主義神学の中で明らかである。福音派が現代神学書を読んでも、そのほとんどが福音主義でない立場で書かれた著作だろう。しかしながら、我々福音派としても、現代「福音主義」神学について学ぶ必要はある。福音派陣営は今や伝統的に受け入れられてきた福音派の基準とは異なる神学的見解を持った人々をも抱えている。ミラード・エリクソンによ

⁴ Thomas C. Oden, *The Rebirth of Orthodoxy: Signs of New Life in Christianity* (San Francisco: Harper, 2003). オーデンは古代教会の聖書的、神学的土台を調べることに焦点を当てた *Ancient Christian Commentary on Scripture* の共著者。

れば、福音主義神学は今や右派と左派に分かれているという。⁵ もはや「福音主義」という言葉は、同じ福音主義に立つ神学者の間でも、同じ意味で理解されることはなくなってしまったのである。

ここ 3 年間、北米の学会である、福音主義神学会 (ETS) の年会では、少数の左派の神学者たちの「オープン神論」(open theism) を議論してきた。2001 年に、ETS は、そのようなオープン神論から遠ざかるという神学的声明を発表した。2003 年には、ETS のメンバーは議論の上で、二人の左派神学者たちのメンバーシップ剥奪には反対する決定を下した。⁶ ようするに、現代福音主義神学の世界に足を踏み入れることは、混乱の経験をすることに他ならない。能弁で有名な福音主義神学会の少数派が、まだまだ、過渡期であると主張してきたとおりである。

現代神学の共通語としての英語

現代神学の言語は英語である。一般に、重要な現代神学の著作で、英語で書かれていないもの、もしくは英語に翻訳されていないものはないと言ってよい。神学者が日本人であれ、中国人であれ、インド人であれ、アフリカ人であれ、フランス人であれ、ドイツ人であれ、もしその人の著作が重要であるとみなされれば、英語で翻訳されるか、英語で執筆されるであろう。もし、その著作が、英語で書かれていないなら、今後世界中の神学者によって研究されることはないということになる。このことは大学院の博士レベル (Ph.D、Th.D) で学んでいる組織神学の学生に卒業認定を与える教授陣の間では、大いに議論的になろう。中には、もはや現代神学の分野では、英語以外の近代言語を学ぶ必要はないという強硬な意見さえある。

現代神学の重要問題

神学の方法論における諸問題は重要性を増している。たとえば、どんな近年の組織神学書でも、いわゆる神学者たちが序論 (文字どりの意味としては、「ことば以前」と呼ぶものに慎重でかなりの注意を払っている点) があげられる。それらの著作の序論の章では、神学者たちは、神学的な土台として何を採用しているかの議論を含めて、彼らの神学的方法論について述べている。たとえば、エリクソンの組織神学書では英文では最初の 175 ページ、和訳でも最初の 195 ページを方法論について割いている。⁷ シーセンやホッジのような古い組織神学書では方法論についてはほんのわずかしかがページが割いていない。ところが、現代神学の著述には、方法論だけに全てを費やしているものも多い。この傾向は読者応答理論に関する複雑な議論と

⁵ Millard Erickson, *The Evangelical Left: Encountering Postconservative Evangelical Theology* (Grand Rapids: Baker, 1997).

⁶ ピノックとサンダースはETSメンバーが議論した二人の神学者 (<http://www.etsjets.org/> 参照)。ピノックとサンダースは今もETSのメンバーである。ボイドはもうメンバーではない。Clark H. Pinnock, *Most Moved Mover: A Theology of God's Openness* (Grand Rapids: Baker, 2001); John Sanders, *The God Who Risks: A Theology of Providence* (Downers Grove: IVP, 1998); Gregory A. Boyd, *God of the Possible: Does God Ever Change his Mind?* (Grand Rapids: Baker, 2000). これらの神学者に対する反論は各方面から出されてきた。恐らくその一番良いものの一つは、ミラード・J・エリクソンの著書、*What Does God Know? The Current Controversy Over Divine Foreknowledge* (Grand Rapids: Zondervan, 2003) だろう。以下に代表的著作をあげる。

⁷ Millard J. Erickson, *Christian Theology*, second edition (Grand Rapids: Baker, 1998). ミラード・J・エリクソン『キリスト教神学』第一巻、いのちのことば社、二〇〇三年。

同様に、特にポストモダンについての著述にもあてはまる。⁸

新正統主義神学者である、バルトやブルンナーの時代以来、神論は中心テーマであった。これらの神学者たちは神を遠い存在としてみなしてきた。⁹ その時代のある神学者たちは神はあまりにも遠く、死んでいるときえ考えた。「神の死」の神学がそれだ。現代神学でも、それらの神学者たちから神論に重点を置く傾向を受け継いでいるが、今日では神の人格的な側面に強調点がある。つまり、現代神学は我々人間が経験するようなある種の限界を神にも設けようとするきらいがある。たとえば、未来に関して言えば、神は人間の自由な選択について、限られた知識しかないとしばしば理解されている（オープン神論）。つまり、神は、時間を超えた存在であるというよりも、時間の中に制約された存在としてみなされているというわけだ。

神学上の人類学に分類される多くの現代の著作は神論に関する議論と深く関わっている。神学上の人間性の理解は以下の現代神学の重要議論に対して中心的な役割を果たしている。つまり、開放の神学(liberation theology)、フェミニズム、教会における女性の役割、救済論、一般啓示、諸宗教、諸文化、グローバル神学(global theology)、人間の尊厳、生命倫理、そして環境論である。

教会論も最近の議論の的となっている。¹⁰ 現代神学における多くの関連する諸問題、つまり、救済論、神学的人類学、そして三位一体神学（神論）に対して教会論が実際に役に立つ知識を引き出してくれている。歴史的に、教会論では教会の本質に関する研究に焦点が当てられてきた。しかし、昨今では、より多くの関心が、教会の目的や使命、教会におけるリーダーシップ、教会の意思決定の仕組みに当てられている。ここにこそ、多くの益をもたらした現代神学の一面がある。これは、教会を最優先に考える非西側諸国の神学者たちによる貢献の賜物であろう。

現代神学の重要神学者

過去 100 年間を超す多くの神学運動は、ある一人か二人の神学者に大きな影響を受けてきた。よって、重要な現代神学者の研究は、しばしば現代神学の研究と同等とみなされる。次の幾人かの神学者は現代神学を理解する上で重要である。すなわち、バルト、ブルンナー（新正統主義）、モルトマン、パンネンベルグ(希望の神学(theology of hope))、グティエレッツ(開放の神学)、ラーナー、カング(第二バチカン・ローマカトリック神学)、ホワイトヘッド、ハートショーン(プロセス神学)、エリクソン、マクグラス、グレンツ、その他の神学者たち(福音主義神学)である。

結論

神学の目的は、教会と深く関わっている。神学はその土台である聖書について教会を教えるものだ。しかし同時に、神学は教会の置かれている幅広い文化や世界

⁸ 参照例 Kevin VanHoozer, *Is There a Meaning in This Text? The Bible, the Reader, and the Morality of Literary Knowledge* (Grand Rapids: Zondervan, 1998).

⁹ 神に関する近代神学の著述についての参考資料としては、Klaus Boockmuehlによる *The Unreal God of Modern Theology* (Colorado Springs: Helmers and Howard, 1988)がある。(訳注) 読者応答理論とは、書き手の意図よりも、読み手がどう感じるかが重要視される現代的な読書理論。

¹⁰ 参照例 Veli-Matti Karkkainen, *An Introduction to Ecclesiology: Ecumenical, Historical and Global Perspectives* (Downers Grove: IVP, 2002); Miroslav Volf, *After Our Likeness: The Church as the Image of the Trinity* (Grand Rapids: Eerdmans, 1998).

を理解するために正しい見地を与えてくれるものであるとも信じる。神学は聖書と文化という二つの極の間で機能している。福音主義神学者にとって、啓示の極である聖書はいつも強調されなければならないものだ。同じことが、福音派の牧師や宣教師についても言える。なぜなら神学者だけが「神学をする」のではないからだ。牧師が聖書を教え、またこの世での信仰者の生活について教えているということは、彼らもまた神学をしているということだ。講壇からであれ、ペンによってであれ、神学をする者は、現代神学によってもたらされる無数の神学上の選択肢のただ中で、神学的バランスを維持する必要に迫られているのだ。そして良いバランスを持っている人は、聖書を究極の権威とする人である。どうか神様が我々の神学的バランスを喜んでいてくださいますように。